

2026 年第 3 週の報告です。

京都府全体のインフルエンザの定点当たり報告数は 11.46 件と先週 (10.86 件) より少し増加しており、注意報が継続しています。

感染性胃腸炎の定点当たり報告数が南丹で 36.50 件まで増加し、警報レベルになりました。南丹ではそのほかに水痘の警報レベルが継続しています。

全数把握対象疾患は結核が 6 件、腸管出血性大腸菌感染症・レジオネラ症・カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症・劇症型溶血性レンサ球菌感染症と百日咳がそれぞれ 1 件、侵襲性肺炎球菌感染症が 5 件、梅毒が 2 件報告されました。

侵襲性肺炎球菌感染症 (IPD) は、肺炎球菌が血液・髄液などの無菌部位に侵入して感染し、菌血症や髄膜炎などを引き起こす疾患です。肺炎球菌自体は鼻咽頭の常在菌であり、「誰が持っていてもおかしくない菌」ではありますが、その保菌率は成人で 5~10% と高くない一方、小児では 20~40% に及びます。小児から成人 (特に高齢者) に伝播する場合や常在していた本菌が何らかの原因で進展する場合に発症します。

新型コロナウイルス感染症の流行が本格化した 2020 年以降、年間 100 件程度あった IPD の府内報告数は激減し、2021 年には約 4 分の 1 の 24 件まで減少しました。しかし、その後 2022~25 年にかけて 42 件→53 件→67 件→86 件と年々増加しており、かつての水準に戻りつつあります。

IPD の発症予防にはワクチン接種が重要です。2026 年 1 月現在、定期接種用の肺炎球菌ワクチンには、高齢者 (65 歳の方など) に用いられる「23 価肺炎球菌莢膜ポリサッカライドワクチン (PPSV23)」と小児に用いられる「沈降 20 価 (または 15 価) 肺炎球菌結合型ワクチン (PCV20 または PCV15)」があります。ただ、PPSV23 については、有効性及び費用対効果等を検討した結果、定期接種ワクチンから外し、今後は高齢者の定期接種についても PCV20 を使用する方針が既に厚労省から示されているところです。小児の定期接種については従来通り、PCV20 または PCV15 が用いられ、標準的には生後 2 か月から計 4 回接種することで、終生免疫が獲得できるとされています。接種を受ける場所や費用についての詳細はお住まいの市町村に、接種の可否や注意事項等については医師にそれぞれご相談ください。